〈古代〉

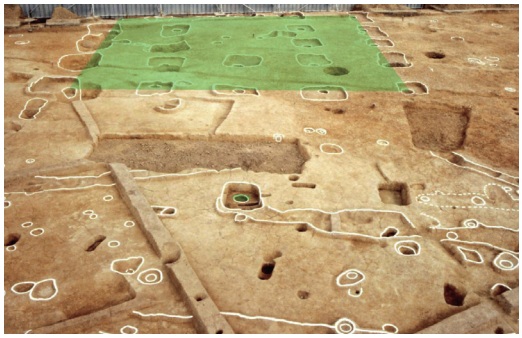
住吉は世界の港となり、航海の神を祀った

古墳が作られたころには、住吉大社の南に流れる細江川あたりに「住吉細江」という入江があり、さらに南の遠里小野付近の大和川の流れるあたりは「朴津水門」「浅香浦」と呼ばれた入江になっていました。これらの沿岸一帯の入江には多くの漁船や外交船が発着する港があり、外交や交易の場として栄えていたと考えられます。

住吉大社は航海の安全を守る神社として広く崇拝され、もともと大阪湾岸の港で活躍していた「津守氏」という一族が、代々神主をつとめていました。この「津守氏」には中国や韓国に使者として派遣された外交官もおり、また、遣唐使船に神主として乗り込み、船上で航海の安全を祈願した人もいました。さらに摂津国や住吉郡の長官（国司・郡司）をつとめる人もいました。

発掘では、住吉大社の境内とその周囲、南住吉1・2丁目の南住吉遺跡や殿辻遺跡で、今から1千5百年ほど前の古墳時代から、1千3百年前の奈良時代の建物跡や土器が出土しています。また、遠里小野遺跡では飛鳥時代の巨大な楼閣建物や長大な建物が見つかっており、港に関連する施設ではないかと考えられています。住吉大社を中心にして栄えた古代の住吉のようすが少しずつわかってきています。

また、日本最古の書物である『古事記』や『日本書紀』に「依網池」という貯水池がつくられ「依網屯倉」という国の施設が置かれたことや、そこを管理していたらしい「依網屯倉阿弭古」という人物が登場します。現在の阪南高校の敷地から大和川を越えた南側まで大きな池があり、その池畔にある大依羅神社はその一族が守っていたといわれています。

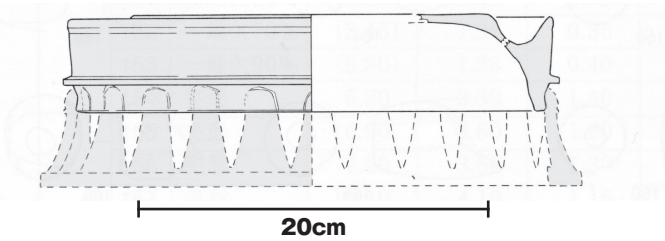


左は殿辻遺跡で見つかった古代の建物と細江川。右は遠里小野遺跡の楼閣建物跡。飛鳥時代の巨大な建物跡で、海を監視する施設だったかもしれない

大依羅神社とその近くにある依網池址の石碑。かつては巨大な貯水池が広がっていた

バックルと硯は「セレブ」の証明

南住吉遺跡の発掘ではベルトにつける銅製のバックルが出土しました。これは奈良時代のもので、当時は役人など身分の高い人が身につけたものです。また、津守廃寺に近い殿辻遺跡の発掘では陶器製の硯が出土しています。墨で文字を書くときに必要なものです。当時文字を書くと言えば、役所の文書を作成する役人やお経を書き写したりするお坊さんなど一部の人に限られます。バックルと硯、これらは住吉で活躍していた官人や僧侶たちの姿を語ってくれます。

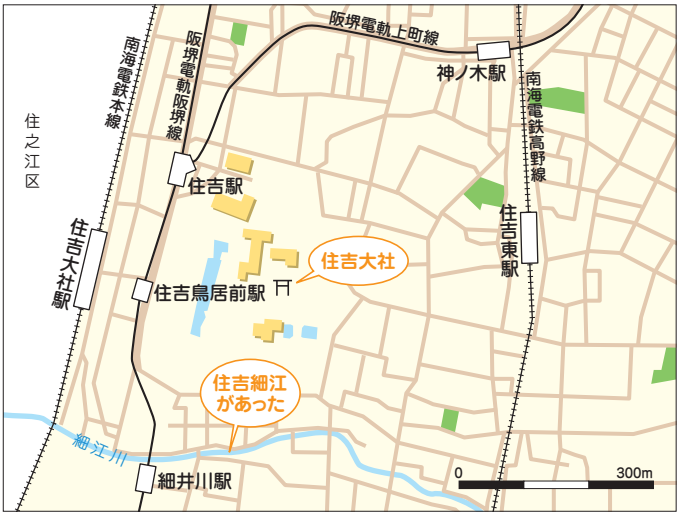


住吉区ゆかりのキャラクター 5

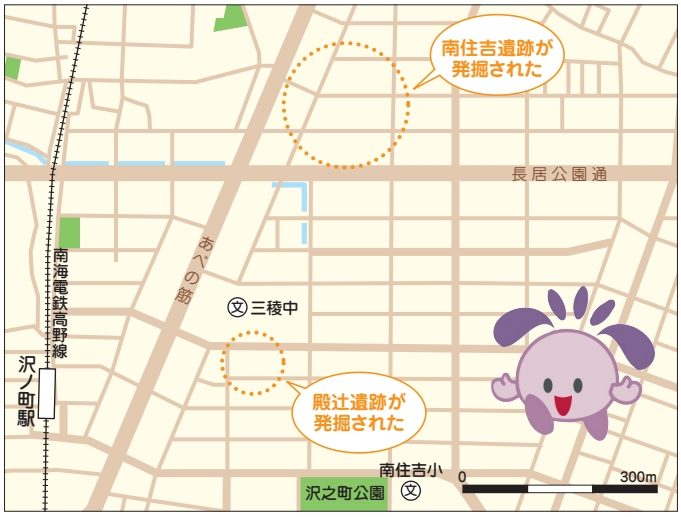
バックルの役人

奈良時代の役人が身につけたベルトの金具

住吉大社と住吉細江



南住吉遺跡と殿辻遺跡



大依羅神社と依網池跡

遠里小野遺跡と浅香浦